

【第17回年次大会 パネル・ディスカッション：文化テキストとジェンダー 要旨】

おとぎ話の転覆とフェミニズム童話

谷口秀子

『シンデレラ』や『白雪姫』などをはじめとする西洋のおとぎ話のヒロインの多くには共通した特徴がある。若くて美しいヒロインの多くは、主体性と行動力に乏しい女性であるが、そのことが結果としてヒロインを幸せに導くこととなる。多くの場合、ヒロインは、たとえば継母などの他の女性の悪意のあるひどい仕打ちによって苦境に陥るが、ヒロインはただ健気に耐えるのみで、自らの力で苦しい状況からの脱出を試みることはなく、「理想的な」男性（その多くは王子である）の出現によって苦境から救われ、幸せになる。改めて言うまでもなく、その幸せとは助けてくれた男性との結婚であり、「そして二人はずっと幸せに暮らしました」という言葉とともに多くのおとぎ話は終わる。

数多くのおとぎ話において、このような気立てが良く従順で受け身の女性と彼女を救い出す行動的で頼もしい男性という組み合わせ、および、女性を善と悪（聖女と魔女）の両極に分けて対立させる二項対立的な構図などが見られる。このようなジェンダー・ステレオタイプは、おとぎ話が成立した時代の家父長制的な社会の価値観を反映したものと考えられているが、現代でも親しまれているおとぎ話の中に取り込まれ、繰り返し語り伝えられることにより、因習的なジェンダーを再生産する装置となっている。

従来のおとぎ話におけるジェンダー提示を問い直し、おとぎ話のジェンダーを「転覆」することを目指して、1970年代と80年代を中心に、主に北米とヨーロッパにおいて、ジェンダーの観点からのおとぎ話の語り直しや、主体的で勇敢な女性像を提示する新たなおとぎ話の創作の動きが起こった。このようにして描かれた作品をフェミニズム童話（feminist fairy tales）と呼ぶが、1983年にイギリスで出版された Diana Coles による *The Clever Princess*¹は、このようなフェミニズム童話に属する作品のひとつである。*The Clever Princess* は、本国ではさほど大きな注目を浴びなかったものの、日本では、1989年に『アリーテ姫の冒険』²という題名で、「子供が理解しやすいフェミニズムの本」³として翻訳され、大きな反響を呼んだ。

本発表では、『アリーテ姫の冒険』を例に、フェミニズム童話の特徴を分析し、フェミニズム童話の意義について考察した。また、『アリーテ姫の冒険』が当時の日本においてどのように受け取られたかについても検討を加えた。

*本研究は、JSPS 科研費 26370280 の助成を受けたものです。

註

1. Coles, *The Clever Princess* (Sheba Feminist Publishers, 1983).
2. ダイアナ・コールス 『アリーテ姫の冒険』、グループ ウィメンズ・プレイス訳、学陽書房、1989.
3. 横浜女性フォーラム 『アリーテ姫の冒険』あとがき、『アリーテ姫の冒険』、学陽書房、1989.

(たにぐち ひでこ・九州大学教授)

[目次に戻る](#)